

Follow up

会長の時間 11－秋刀魚にまつわる話

今週も例会によるこそお運び頂きました。本日は秋刀魚についてトピックを拾ってみました。

秋のサンマ漁ですが、近年は大不漁に見舞われています。昨年 2019 年の水揚げは、前年 2018 年の 3 割程度となる 4 万トンに過ぎませんでした。これは過去最低の水揚げ量だそうです。しかも水産庁の予測によると、今年 2020 年はその 2019 年をも下回ると見られ、記録的な不漁になる可能性が高いと言います。その原因を気候変動による海水温の異常や、中国などの周辺国の乱獲に求める声なども多くなっていますが、残念ながら現状のところ理由ははっきりしていません。

さて秋刀魚と言って皆さんは何に連想を飛ばすでしょうか？落語で言えば「目黒のサンマ」、詩で言えば佐藤春夫の「秋刀魚の歌」“さんま、さんま、さんま苦いかしょっぱいか”でしょうか？

わたくしは大好きな名匠・小津安二郎監督、彼の最後の映画「秋刀魚の味」が浮かびます。封切は 1962 年。短いので予告編

(https://www.youtube.com/results?search_query=%E7%A7%8B%E5%88%80%E9%AD%9A%E3%81%AE%E5%91%B3) を御覧ください。

男を描かせれば黒澤明、女を描かせれば溝口健二、日本人を描かせれば小津安二郎。畳を意識させるカメラの固定ローアングル、日本語を特徴づける単調でぶつぶつ切れ切れ、それでいて反復の多い独特のセリフまわし、いわゆる小津調。やはり日本人を描かせれば小津安二郎だと思います。

ところでこの映画に食べ物が幾つか登場しますが、肝心の秋刀魚はどこにも登場しません。なぜ秋刀魚も食べていないのにこんなタイトルがついたのか。

娘を嫁がせる父親の悲哀を描き、忍び寄る老いをどう受け止めるかを静かに問う、小津作品の集大成として別れと人生の悲哀を「秋刀魚の味」に託し、涙のしょっぱさとほろ苦さを表したのではないかと想像できます。そのあたりを先ほどの予告編では、「渴望の味と香りを放つ感動の巨編」と評していましたね。

最後に小津の名言「どうでもよいことは流行に従い、重大なことは道徳に従い、芸術のことは自分に従う」をご紹介します。

私もかくありたいと思います、芸術の部分をロータリーにでも変えまして。

本日はこれにて、おやかましゅうございました。

2020 年 9 月 24 日第十一例会 会長の時間にて 東野裕暢